

## 『論理哲学論考』における写像理論について

浅野将秀 (Asano Masahide)  
首都大学東京人文科学研究科

本発表では、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』（以下『論考』）における写像理論について考察する。よく知られているように、写像理論は『論考』の主要なテーゼの一つであり、彼の言語観の根底をなしているが、そこではその名の通り「像」という概念が中心的な役割を果たしている。本発表では、この「像」という概念について、彼が念頭においているいくつかの具体的事例を用いて考察し、その考察を通じて、『論考』の内で展開されている彼の言語観の眼目がどのようなところにあるのかを明らかにすることを試みる。発表は以下のような手順で進めるつもりである。

まず始めに、ウィトゲンシュタインが像の具体例として念頭においているいくつかの例——例えば、パリの法廷で用いられた模型——が、どのような意味で像といえるのかについて考察する。その際、『論考』の冒頭部で展開されている彼の像一般についての考察にどのような意義があるのかについても見ていきたい。

次いで、先の像に関する考察を、現代の理論的道具立てを用いて再構成することを試みる。ここでは、パーワイズとセリグマンによって開発された「チャンネル理論」における最重要概念である「情報同型写像 infomorphism」を用いようと思う。チャンネル理論は本来、ドレッキ由来の情報の概念の分析を目的として開発されたものであるが、ウィトゲンシュタインが念頭においている事例についても応用可能であると発表者は考えている。そしてこの理論における諸概念のふるまいをみることによって、『論考』における写像理論についての考察がより深まることが期待される。

最後に、これまでの考察をふまえ、「命題は現実の像である」という主張に典型的に見られるような、像という概念から言語の本性を捉えようとする『論考』におけるウィトゲンシュタインの言語観を見直し、その眼目がどのようなところにあるのかについて考察したい。その際、ここで見直された『論考』の言語観が現代的な観点からして何かしら啓発的なものであるのかについて、現時点での発表者の見通しを示すことができればと思う。